

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

(VIII)

『コリオレーナス』論（その二）

民衆と護民官

木 村 輝 平

シシニアス 頭数で決めて得られた賛成の目録，しかと持参したか。

警護官 はい，用意しました。

（3幕3場8～11行）

(I)

コリオラヌスの物語において，ひとつの重要な要素でありまた興，味深い問題でもあるのは，貴族と平民の間の争い——あるいは階級闘争——の部分である。ローマに共和制が始って間もないこの時代，平民ははじめて自分たちの権利を伸長させ始めたが，多くの貴族はそれを苦々しく思っていたわけであり，その筆頭が他ならぬコリオラヌスであった。今回はこの貴族と民衆の対立という問題に的を絞って，『コリオレーナス』とその素材について検討することにした。

『コリオレーナス』では冒頭から武器を携え，人民の敵コリオレーナスを殺

し、貴族に安い穀物を配布させようと蜂起した民衆が登場する。このシーンが「コリオラヌス伝」から出ていることは間違いないが、その対応関係は他の場合ほど単純なわけではない。というのはここはプルタルコスが述べている二つの大きな事件を下敷きにして、それを統合した形になっていると思われるからである。まず挙げられるのは、コリオリの戦い後、穀物の不足あるいは価格高騰に対する不満からデマゴグに煽られた民衆が騒乱を起こした事件である。大筋において冒頭シーンはこの事件を土台にしていると思われるが、この事件に関連する植民派遣の問題やコリオラヌスの不満分子への対抗行動などはシェイクスピアは取り扱っていない。

もうひとつの事件は、いわゆる聖山事件と呼ばれるもので（前495年）、一口に言えばこれは、平民が不当に経済的に圧迫され苦境に追い込まれたことから不満を抱き、ローマ近郊の聖山に大挙して籠ってしまったという出来事である。この事件はコリオリの戦いの前のことなのでシェイクスピアの劇の騒乱と同じ時期設定ということになるが、しかしシェイクスピアは聖山という場所には全然言及していない。それではどうして、この事件と冒頭のシーンとの関連が考えられるかと言うと、シェイクスピアの場合にもプルタルコスがそこで触れている借金苦や貧民に対する苛酷な悪法などへの言及があること、また護民官制は聖山事件がきっかけとなって発足したのだが、¹⁾ 同じくその護民官誕生についても言及があることなどが挙げられる。

さらにもうひとつの、そしてより強力な結び付きは、プルタルコスの聖山事件の場合と同様、ここでもメネニウス（Menenius）という長老が出て来て、「手足と腹の寓話」なるものを語り、首尾よく平民を説得することに成功することである。「コリオラヌス伝」によればその寓話は次のようになっている。

ある時人間の体の手足が腹に反乱を起こして次のような不平を言った。すなわち、自分たちや他の部分は一生懸命働き、食欲などの必要を充しているのに腹は体のまん中に陣取って何もしないではないかと。すると腹は少しも騒がず、彼らの愚行を笑っ

で言った。なるほど私は体に必要な食物を真先にいただく、しかし私はその後でまたそれを養分として体の各所に送っているのだと。

(第6節)

これは『対比列伝』の中に時折見受けられるような、おそらくプルタルコス好みのなかなか気の利いた話で、シェイクスピアにおいても1幕1場の95行から145行目にかけて語られている。この間に時々市民の合の手が入るのを割り引いても、シェイクスピアのものはプルタルコスの場合より長く念入りなものになっている。ところがこれは単に長くなっているばかりではなくて、素材面から言うと、実はプルタルコスの他にも数種類の書物を利用しているということがある。長くなるので具体的に表現の類似を示すことはしないが、素材として間違いないと考えられているのは、リウィウス (Livius) の『ローマ史』第32巻 (これは1600年にホランド——Philemon Holland——の英訳が出ている)、ウィリアム・キャムデン (William Camden) の『大英国記拾遺集』(*Remaines of a Greater Worke concerning Britaine*, 1605)、およびウィリアム・アベレル (William Averell) の『逆論合戦集』(*A Marvailous Combat of Contrarieties*, 1588) である。この他にも、それほど類似が明確ではないが、やはり関連性が考えられる文献としては、フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) の『詩の弁護』(*An Apology for Poetry*, 1595) とノース訳の『ビドパイの寓話集——ドニの道德哲学』(*Fables of Bidpai, The Morall Philosophie of Doni*, 1570) とがある。

一般にシェイクスピアの劇において、出典が数種類に及ぶことはごく普通だが、ただ、わずか数十行の話にこれだけ集中するというのは珍らしい。もちろん、この話が面白いので色々な本に書かれていて、シェイクスピアには自然利用しやすかったということはあるだろうが、それでも、この凝り様は奇妙と言えば奇妙かも知れない。

この入念な書き方をシェイクスピアの執筆時の社会問題と関連づける面白い見方もある。E・C・ペテット (Pettet) によれば、シェイクスピアがこの寓

話をこのように拡大したのはそれが自分が言いたかったことを表明する絶好の機会となったからだと言う。²⁾ 彼の考えでは、この寓話の内容はいわば「階級性の機能論」であって、『トロイラスとクレシダ』のユリシーズや『ヘンリー五世』のカンタベリーの大司教の説くところと同じで当時の政治思潮を反映したものである。しかし、『コリオレーナス』の執筆の頃にはシェイクスピアにはそれがより切実なものになっていた事情があるというのである。

というのは当時シェイクスピアは社会的大事件を経験したばかりのはずだからである。その事件というのは、1607年初夏ノーサンプトンシャーに端を発し、近県に波及したミッドランズ地方の農民の一揆である。彼らは「囲い込み」に対する危機感から、それを次々と破壊して行った。また、この時期に穀物の飢饉、穀物価格の高騰といったこともある程度あったようであり、ペテットはこのことも一揆に関係したのではないかと推定している。この騒乱は当然シェイクスピアの故郷のウォリックシャーにも及んだ。シェイクスピアはこの頃すでにストラトフォードに土地を所有する立場になっており、グランビルバーカー (Harley Granville-Barker) のようにシェイクスピアがその時までには故郷に引っ込んでいた可能性を示唆する人さえいる。³⁾ その蓋然性はともかく、シェイクスピアにとってその事件が大きな関心をひかなかったことはないであろう。それでペテットの主張はこの事件がシェイクスピアに「手足と腹の寓話」の書き方に影響を及ぼしているし、またそればかりか、この劇における群衆・民衆に対する彼の厳しい描写ぶりとも関連しているというのである。

因みに、『コリオレーナス』の執筆時期はわずかな量のいわゆる外的証拠と内的証拠から判断して、1607年後半から1608年にかけての時期ではないかと推測されており、この点ではペテット説にあまり不安はない。それではペテットのような考え方に賛成できるかという点、これはあまりに単純明快で筆者などは逆に躊躇を覚える。こうした問題でそう直線的に反応するのは、どうもシェイクスピア的ではないという気がする。また、次のようなこともひっかかる。

すなわち、ミッドランズの一撥は農民主体のものと考えられるが、この劇での民衆には農民色は感じられず、彼らはもっぱら都市生活者、とりわけ職人(apron-men, 4・6・97) が主体であるようだということである。もちろん、この劇にはローマ劇という制約があり、そのせいということもあるが、職人主体の民衆というのは他のシェイクスピア劇にもあてはまる特徴であり、こうした問題では一考を要する重要な点であろう。

(Ⅱ)

すでに述べたように、護民官制は聖山事件以後、平民の権利を保護するため創設されている。これによって平民の代表者たる護民官は立法、行政、選挙などの色々の事柄に拒否権や干渉権を行使することになった。ということはひとつの政治制度の活動内容を別の独立機関が否定することを許すようなもので、ローマの政治体制は非常に奇妙な、矛盾に満ちたものになったと言える。だから、保守的な貴族にとってはこの制度ががまんならないものであったことは容易に想像でき、「コリオラヌス伝」においても、コリオラヌスは元老院において護民官制を「執政官制を汚し、国家を分裂させる」ものとして激しく非難している(16節)。⁴⁾これがコリオラヌスが追放されることになるそもそものきっかけとなるのである。それはともかく、実際にはこの奇妙な制度のおかげで貴族と平民が離反せずすみ、目覚ましいローマの発展が可能になったのはよく知られた事実である。

「コリオラヌス伝」では誕生した護民官の数は5人となっているが、プルタルコスが名前を表して、その行動を記しているのはユニウス・ブルトゥス(Junius Brutus)とシキニウス・ウェルトゥス(Sicinius Velutus)の二人だけである。二人に関するプルタルコスの記述はあまり多くはないが、それでも二人は聖山事件や穀物騒動に大きな役割を果たしたばかりでなく、コリオラヌスの

追放には指導的活動をしたらしいことが読み取れる。概して、彼らは民衆の操作に長けた策士タイプのものである。

シェイクスピアの劇ではこの二人はコリオレーナスや貴族に対抗するかなり重要な登場人物になっている。シシニアスとブルータスは民衆を巧みに扇動してコリオレーナスの執政官当選を阻止し、ついには追放することに成功する。彼らはたしかに民衆を擁護するために熱心に闘うのであるが、他方そこには何か性格的な要素も絡んでおり、動機の卑しさのようなものも筆者には多少感じられる。これは筆者の過敏反応かも知れないが、シシニアスとブルータスの姿にはどこかマキャベリ風悪漢というシェイクスピアにはお馴染みのイメージがダブるのである。

シシニアス さあ、キャピトルに行こう。
 皆がそこに着く前に。これもわれらが細工したからで、
 民衆のせいばかりではないのだが、
 きっとそう見えることだろう。

(2幕3場258～261行)

なお、この二人はいつも一緒に言うことも大体似ており、同一人物の分身という印象もあるが、発言内容によく注意してみるとシシニアスの方がやや主導権を握っているかのように見える。これはたぶん「コリオラヌス伝」の中の「護民官の中でもいちばん残酷で気丈なシキニウスは……」(18節)という記述の影響があるのではないと思われる。

ところで、『コリオレーナス』という劇の鑑賞という立場からすると護民官という官職の性質について詳しい知識はまったく必要ないが、注釈学的にはこのことに関してなかなか微妙な難しい問題もないわけではない。その問題とは彼らの職務権限のことである。この劇では護民官にしては権限が強すぎるのではないと思われる箇所がある。そこでは、護民官の面前で護民官制と民衆

を罵ったコリオレーナスを二人は反逆者として逮捕を命じ、さらには政治犯を処刑したことで有名なターペイアの岩に連れて行かせようとする（3幕1場）。それで騒動が大きくなるのだが、司法官でも行政官でもないはずの護民官にしてはこれは権限が大きすぎるのではないかと常識的には考えられるのである。ところが、この件について「コリオラヌス伝」と照合してみると、それはまったく根拠のないことではなく、シキニウスが彼に死刑を宣し、彼をタルペイアの岩で処刑させようとしたことははっきり書かれてある。ただし、正確に読むと、プルタルコスの場合はコリオラヌスが咎められた問題の発言は元老院や民会という公けの場でのことであり、その後の死刑宣告に至るまでの過程も実はもう少し曲折があったことがわかる。一般に歴史的には、護民官の権利は法によって定められていたわけではなく、その身体の不可侵を護るという平民の誓いから生じたとされている。したがって、護民官誕生間がない時代においては護民官の権限の及ぶ事柄・範囲はその時々、政治的力関係に左右されるようなあやふやなものであったと考えられ、プルタルコスの記述を読むかぎりでは奇異な感じは受けない。他方、シェイクスピアの場合は演劇的には護民官の措置は不自然ではないが、歴史的な見地からはやや異和感が残り得ると言えよう。同様の観察はこの劇での護民官によるコリオレーナス追放の決定の仕方や、メネシアスのせりふ（2幕1場69～72行）の中に言及されている護民官の裁判官的性格についてもなされ得るのだが、長くなるのでここでは割愛する。

さて、このような護民官の職務権限の問題はこの劇の本文解釈とまったく無縁というわけではなく、このことのおかげで解釈が難渋させられる、興味深い箇所がある。

Cor. Choler!

Were I as patient as the midnight sleep,

By Jove, 'twould be my mind!

Sic.

It is a mind

That shall remain where it is,
Not poison any further.

Cor. Shall remain!
Hear you this Triton of the minnows? mark you
His absolute 'shall'?

Com. 'Twas from the canon.
(3 幕 1 場84～90行, イタリック体筆者)

コリオレーナス かんしゃくだって!
 おれが深夜の眠りのおとなしくとも,
 これは正真正銘, おれの本心だ。
シシニアス その心の毒はもうこれ以上
 広がらぬようしてくれよう。
コリオレーナス 「してくれよう」だと?
 雑魚の太将の言うことを聞いたか, みんな?
 断固「してくれよう」というのだ。
コミニアス それは越権行為だぞ。

ここまでの状況は, 平民たちの支持を取り付け, 執政官に就任できると思って
いたコリオレーナスが彼らの変心を護民官から聞かされて憤り, 民衆を罵って
いたところである。二人の護民官はそれを聞き咎めたので, メネニアスがそれ
を彼のかんしゃく (Choler) のせいとしてかわそうとした。冒頭のコリオレー
ナスの言葉はそれを受けている。

問題なのはコミニアスの “Twas from the canon.” という言葉であるが,
その主語, “T[It]” は明らかに上のシシニアスの発言を指している。その発
言は暗に何らかの対抗措置をほのめかしているようであるが, “was” という
時制からして, コミニアスが問題にしているのは, コリオレーナスの場合と同
様に, シシニアスの命令的あるいは威嚇的口調のことであろう。ところが, こ
のコミニアスの言葉は実は次の三通りの解釈が可能なのである。

(1) 大砲なみに威勢がいいな。

(2) それは越権行為だぞ。

(3) それは権限にあることだ。

まず、毛色の変った(1)の解釈はテキストの問題に由来している。この劇の唯一の版本は二折本 (Folio) であるが、そこではここは “T was from the Cannon.” となっている。それで上のような意味になるが、これではアナクロニズムがひどすぎるといわけか、ロウの校訂以来、*canon* が正しいとされている。しかし、これから述べるように(2)も(3)も決定的なものではないだけに、これを捨てるのは惜しい気もするところである。

(2)と(3)における“*canon*”は本来は教会の掟のことで、ここでは法、定めの意味であろう。それで(2)と(3)がまったく正反対の意味になるのは“*from*”をそれぞれ、シェイクスピアによくあるように“*away from*”の意味にとるか、あるいはそのまま普通の意味にとるかに依っている。(2)の解釈をはじめて記したのはドクター・ジョンソンで、その考えは、護民官といえどもそんなことを言える権利はない、定めに反するというものである。他方、(3)の方は M・メイソン (Mason) が言い出したもので、これは逆に護民官のあらゆることへの拒否権に言及するものだとしている。常識的にはメイソン説の方は薄弱に思われるが、この劇ではすこし後でシシニアスはコリオレーナスを暴言の故に逮捕しようとじっさいにするのであるから、シシニアスが先のような言葉を吐くのも越権行為でないかも知れず、論理的にはメイソン説もりっぱに成立し得る。ただ、劇の流れから言えば、コミニアスの言葉はそれほど重いものではないから、これにあまり深いあるいは複雑な意味を与えない方が自然であろう。その意味では、ドクター・ジョンソン説の方がやや妥当性が強い気がする。なお私見であるが、シシニアスの言葉がほめかしているのは、上に述べたように、処罰のことかも知れないが、もうひとつこれとは別に、コリオレーナスの執政官当選阻止のことを指しているのではないかと考えられるのである。

(Ⅲ)

コリオラヌスや貴族勢力と対立した平民・民衆については「コリオラヌス伝」はどのように記述しているであろうか。実のところ、伝中の平民自体についての描写はあまり多くはないのであるが、彼らが関与した事件の記述からは、彼らの権利主張やそのための行動などはそれほど過激なもの、無理なものには概して思われない。聖山事件の場合は国のため何度も戦い、功劳のあった平民の多くが経済的苦境に陥っていたのを元老院が放置し、しかも一旦は救済を約束しながら戦争後はそれを反古にするということが原因であった。また、彼らはコリオラヌスを執政官に選ぶつもりのところを土壇場で態度を変えてしまったことがあったが、これも多勢の貴族を引き連れた彼の広場への入場ぶりが彼への反感と怖れをよみがえらせたからであった。コリオラヌスの追放の件にしても、そのそもそものきっかけは彼が元老院で穀物の無料配布に反対し、護民官制を攻撃したことにあった。しかも、その弁明のために民衆の前に現われたはずの彼が民衆非難の演説をぶち上げたのでは火に油を注ぐ結果になったのも当然である。

コリオラヌスを追放したこと自体は行き過ぎに思えるが、これは護民官の策謀が功を奏した形で民衆はそれに乗せられていたように読める。一般に「コリオラヌス伝」の民衆は護民官や煽動家の意のままに動かされ易い付和雷同性があるように見受けられ、それが彼らにマイナスのイメージを与えているように思われる。もうひとつ彼らに悪い印象を残す点は追放後のコリオラヌスがアンティウムの軍を率いてローマに攻めて来た時の彼らの反応である。プルタルコスによると、その時民衆は急にそれまでの態度を変え、コリオラヌスの有罪宣告と追放を解除することを望んだという。その詳しい事情は窺い知れぬところであるが、とにかくこれではあまりに便宜主義的で読者としてはどうしても彼

らの無節操さを印象づけられてしまう。

以上のプルタルコスの方の民衆についての記述と劇『コリオレーナス』中の民衆の描かれ方を比較してみると、後者の方が全体として辛口の厳しいものになっていることがわかる。もちろん、シェイクスピアにも民衆の側の良い点を示した描写がまったくないわけではない。民衆の人の良さを表わしているような言葉が時には彼らの口から漏れることもある。執政官の選挙の際は民衆はコリオレーナスが自分たちの敵であっても彼の国家への貢献を認めて彼を支持するつもりでいたわけで、彼さえまともな態度を取っていたら事態は違っていただろう。しかし、先の付和雷同癖とか無節操ぶりといったことになると、シェイクスピアの描写は鮮明、強烈であり、プルタルコスの場合と趣きを異にする感がある。こうした民衆の態度はこの劇では群衆心理と結びついて表現されており、そのいやらしさと怖ろしさがたっぷり表現されていると言える。その例はこの劇の群衆シーンのどれを見てもよいのだが、中でももっとも皮肉が利いたものは、先にも述べたコリオレーナスのローマ進撃の際に見せた民衆の反応ぶりを描いた箇所である。この話についてのプルタルコスの文章にやや近いせりふとして、⁵⁾ オーフディアスの「護民官は戦さはダメだし、民衆も追放した時と同じ調子ですぐにあの男を呼び戻したがるだろう」（4幕7場31～33行）という言葉があるが、面白いのはそれとは別にシェイクスピアが独自に発展させた部分で、4幕6場において、コリオレーナスの進撃の報を聞かされた市民たちはその原因となった事柄への自分たちの責任をぬけぬけと否定する。

市民1 オレはだな、追放しろと

言った時、残念だと言ったんだ。

市民2 オレもだ。

市民3 オレもだ。実のところ、皆そうさ。

オレたちのやったことは良かれと思ってやったこと、
あの男の追放には大賛成だったが、本当は嫌だったのさ。

〔中略〕

市民1 神ようがお助けを。さあみんな、帰ろう。

あの男を追放する時、間違いだと言ったんだ、オレは。

市民2 皆そうさ。さあ、帰るんだ。

(4幕6場140～156行)

これでは市民は皆が皆、最高度で無責任で無節操な人間ということになる。このような箇所は民衆あるいは群衆のデタラメさかげんを強く人に焼きつけることは間違いないが、ただ、どこかおかしさを感じさせる要素もあって、完全な写実をはみ出して、やや戯画的な味もあるように思う。ここら辺は、いかにもシェイクスピアらしい余裕のあるところで、このことは『ジュリアス・シーザー』で詩人シンナを襲う群衆や、『ヘンリー六世・二部』でジャック・ケイドに率いられた暴徒にも言える大事な点ではないかと思う。

さらにこの後、護民官たちは護民官たちで臆面もなくメネアスにコリオレーナスのところに説得に赴くように依頼する(5幕1場)。ところが、その護民官よりも民衆の方が一枚上手であることがわかる。すなわち、シシニアスは使者から次のようなニュースを告げられる。

もしも命が惜しければ、ご帰宅を
お急ぎ下さい。平民たちはご同僚を捕え、
小突き回しております。のみならず、あの婦人たちが
失敗して帰れば、一寸刻みで
殺してやると言っております。

(5幕4場34～38行)

事ここに至ると、平民たちの無節操の程度、彼らの品性の卑しさがはっきりする。それは必ずしも、護民官に指導された結果生じたものではないことはいまや明らかであり、結局、民衆という集団は目先の利害や一時の感情に駆られてどの方向に走るのか皆目わからない危険な存在であることになる。民衆へのこうした厳しい批判をひとつの確固とした視点としてシェイクスピアが有してい

たことは間違いなく、上に述べたようなことは先の『ジュリアス・シーザー』や『ヘンリー六世・二部』などの民衆についても正確にあてはまる。

ところで、この劇には実はもうひとつの「民衆」があり、その彼らもやはり同工の存在だと言えば意外であろうか。その民衆とは5幕におけるアンシャムの町の民衆である（これは先回述べた理由でコライオリの民衆と考えることもできる）。劇の最終場面において、オーフィディアスの息のかかった暗殺者たちが「だから彼奴を殺せ」と煽り立てると、人々は口々に「八つ裂きにしろ。すぐにだ。彼奴は息子を殺した。娘もだ。……」と叫ぶところがある（5幕6場121～122行）。ところが、彼らはそのほんの少し前まではコリオレーナスの帰還を大歓迎していたことになっているのである。

暗殺者1 あなたは早馬のごとくさびしく
 戻られたのに、あの男の帰国は空をつん裂く
 歓呼の中。

オーフィディアス わが子を殺されながら、
 声をかぎりに歓迎するとは、腑抜けの
 馬鹿者どもが！

（5幕6場50～55行）

この場面の群衆シーンはすぐにコリオレーナスの殺害というクライマックスにつながっているだけに緊張感あふれる重要な箇所で、そこに示された彼らの変節は強烈な印象を残すであろう。『コリオレーナス』という政治劇において、群衆心理でどうにも動く危険な大衆というのはひとつの重要なモチーフと思われるが、その味付けたるやかなり濃厚と言わねばなるまい。

（Ⅳ）

シェイクスピア劇では劇中妙に何度も繰返されて、目立つ言葉があることが

多いものだが、『コリオレーナス』においてのそれは「声」(voice) という語であろう。この言葉が用いられるのは主として前半 (3幕3場まで)、それも民衆または護民官が関係する場面や事柄においてであるが、その頻度はかなりのものである。例を挙げるならば、2幕3場においては筆者の数えたかぎりでは28回もこの言葉は使用されている。その意味は元来の「声」の他に、賛否、支持・不支持などの意見とか「票」などの比喩的意味が大部分である。また、そうした意見、考えを持った人を指すこともある。以下その例をいくつか、訳を省略して示すことにする。

Cor. Here come moe *voices*.

Your *voices*! For your *voices* I have fought;
 Watch'd for your *voices*; for your *voices* bear
 Of wounds two dozen odd. . . .

(2幕3場132~135行, イタリックは筆者, 以下も同じ)

Bru. Why, shall the people give
 One that speaks thus their *voice*?

Cor. I'll give my reasons,
 More worthier than their *voices*.

(3幕1場118~120行)

Men. You have made good work,
 You and your apron-men, you that stood so much
 Upon the *voice* of occupation and
 The breath of garlic-eaters!

(4幕6場95~98行)

このような“voice”の頻出はどう理解したらよいのであろうか。まず最初に考えられることはシェイクスピアの利用した材料の影響ということである。

それでノース訳の「コリオラヌス伝」に当たってみると、やはり10箇所近くも同じ意味合い、特に「票」の意味で使われていることを知る。さらにアミョにさかのぼってみると、ここでも“voice”に相当する“voix”が何回か使われていることがわかるが、ただアミョの場合は意味をはっきりさせるためであろうか、時により“les voix et suffrages”(票) という形にもなっている。したがって、シェイクスピアの“voice”多用のひとつの動機としてはノースの訳文(とアミョ)の影響があると言えるであろう。(因みに、ロエブ版でこれらの箇所を照合してみるとギリシャ語は大体“*φωνος*”になっており、これは“voice”より“vote”であろう。)その「声」が「票」の代名詞になるということは古来より政治の場において集团的な声が果たした役割の大きさを考えれば当然のことであろう。注目すべきは、エリザベス朝においても議員選挙の際、この「声」がかなり物を言ったということである。当時一定以上の自由土地保有者からなる有権者(40-shilling free-holder)が集められた選挙会場では、対立候補者の中から議員を選ぶ場合、支持者の声の優劣で判定することが多かったという。⁹⁾あるいはこのような背景も『コリオレーナス』の「声」には本来重っているのかも知れない。

上に述べたことは“voice”多用のいわば周辺の事情にあたるが、他方、これとは別に、この言葉の劇中の意義、効果といった積極的意味合いも考える必要があろう。私見によれば、この「声」は民衆と否定的な意味で結びついており、この劇に顕著な民衆への皮肉な、批判的な視点と直接的、間接的に係わっていると思われる。なぜなら、この劇において、この言葉はほとんどの場合次のことを象徴しているようだからである。ひとつは「多数性」ということである。声は個々には微力であっても政治の場において多数が結集すれば大きな力となる。元来数の多さを頼みとする民衆にとっては「声」は最大の武器であり、彼らにおける「声」が多数性を背後に連想させるのは当然であろう。もうひとつは、「声」すなわち肉声の「情緒性」、「喚情性」である。人の集りにおいて、

発言者の声はその人の意向を伝えと同時に、感情をも表わし、しばしばそれは他に伝染するという面がある。それ故、「声」という言葉は『コリオレーナス』において民衆の付和雷同癖や群衆心理を連想させる働きがあり、たぶん「理性」とか「思慮」とか「分別」とは逆のイメージを担っているように思われる。民衆を嫌い、彼らの政治支配を衆愚政治とみたコリオレーナスがこの言葉を多用しているのも自然なことであろう。

ところで、この劇では“voice”という語に関係して、解釈がきわめて厄介な箇所があるので、それを最後に見ることにしたい。それはコリオレーナスを査問し、処分を決める集会がいよいよ開かれようとする時の次の会話である。

Sic. Have you a catalogue
Of all the voices that we have procured
Set down by the poll?
Aed. I have; 'tis ready.
Sic. Have you collected them by the tribes?
Aed. I have.

(3幕3場8～11行)

シシニアス 頭数で決めて得られた賛成の目録、しかと持参したか。
警護官 はい、用意しました。
シシニアス 区域ごとに集めたのだな。
警護官 集めました。

この箇所は何の予備知識もなしに読むと、解釈するのも、日本語に訳すのもたいへん難しいところである。表面的には平凡な表現ばかりで苦勞の余地がないように見えるが、実際にはその真意が伝ってこないのである。ここはシェイクスピアのローマ史劇では時折お目にかかるように、プルタルコスの記事と引き較べてはじめて真の意味が了解される部分のひとつと思われる。この箇所を書く際参考にされたと思われるノースの訳文は次のようである。’’

And first of all the Tribunes would in any case (whatsoever became of it) that the people proceede to give their voyces by Tribes, and not by hundreds: for by this means the multitude of the poor, neady people (and all suche rabble as had nothing to lose, and had lesse regard of honestie before their eyes) came to be of greater force (bicause their voyces were numbred by the polle) then the noble honest citizens, whose persons and purse dyd duetifully serve the common wealth in their warrs.

ここには護民官が狙ったのは各“hundred”ごとの票による議決ではなく、各“tribe”ごとの票による議決だったことが述べられている。なぜなら、そうすれば彼らの方が貴族、富裕層よりも多数を占めることになっていたからというのである。ところで、この“hundred”（ラテン語 *centuria*）はローマの軍制による組織であり、“tribe”（同じく *tribus*）の方は元来の血族集団ではなく、ローマの地域組織を意味した。（したがって、シシニアスの“tribe”の訳は「部族」「氏族」ではなく「区」とか「区域」でなければならないはずだが、シェイクスピアがそこまで承知していたかどうかは疑わしい。）⁸⁾ それではどうしてそのやり方の方が平民が多数を占め易いのかというと、上の文では「彼らの票は頭数でまとめられたから」(bicause their voyces were numbred by the polle) となっている。これはアミヨの仏語版の“à cause que les voix se contoyent par teste”の忠実な訳なのだが、実はこれはプルタルコスの原文ではなく、アミヨが説明的に付加したものなのである。しかも具合の悪いことに、この注釈は的はずれで、本当は“hundred”ごとの票決によると、貴族、富裕層側の“hundred”の数が多いので、平民側に不利になるという事情があったのである。ここまでノースの文意が理解されれば、上のシシニアスのせりふの意味は自ら明らかかと思われる。つまり、彼はコリオレーナスの処分に関してその賛否 (voice) を各組織ごとに集めさせ、その表 (catalogue) を持参させていたものと考えられるのである。⁹⁾ したがって、これだけの意味を十全に理解させるには、この箇所のせりふはあまりにも簡略にすぎることは明らかだが、

こうした部分を軽く流してしまうというのもシェイクスピアのひとつの流儀ではある。

ところで、上のような解釈に異論がないわけではない。The New Shakespeare 版の編者、J. D. ウィルソン (Wilson) はここでは護民官はさくらを組織しているのであって、“voices” の意味は「票」(votes) ではなくて、さくらの唱和した叫び声 (cries in chorus) を指していると説いている。なるほど、警護官の持参した目録はこの場かぎりのことで、以後言及されることは一切ないし、また、先の引用部分以下はシニウスが警護官に向って民衆に集会での合の手の入れ方を教え込むように申し付ける状況に続いていくので、劇の流れから言えばこれは非常に魅力的な説である。ただ、シェイクスピアの表現に戻してみると、この解釈は “set down by the poll” あたりでかなり苦しい気がするし、また、ノース訳とこの表現の類似性から言っても、やはり無理がある気が筆者にはするのである。¹⁰⁾

(1985年9月)

注

- 1) このことについては、歴史学的には異論もある。
- 2) E. C. Pettet, ‘Coriolanus and the Midlands Insurrection of 1607,’ *Shakespeare Survey*, 3, 1950, pp. 34-42.
- 3) Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare* (1930), Fifth Series, p. 190.
- 4) この批判は『コリオレーナス』においても、コリオレーナスの “double worship” (3・1・141) とか “two authorities” (3・1・108) という言葉で出てくる。
- 5) ノースでは “Then fell there out a marvelous sodain chaunge of minde among the people, & farre more straunge and contrarie in the nobilitie. For the people thought, good to repeale the condemnation and exile of *Martius*.” とある。引用は *The Tudor Translations* シリーズの中の *North's Plutarch*, Vol. II (London, 1892), p. 176 より。
- 6) この辺は J. E. Neale, *The Elizabethan House of Commons* (New Haven, 1950) にくわしい。もちろん、必要があれば頭数を数えることもしたという。なお、この書

物の存在については The Arden Shakespeare 版の 3・3・9～11 についての Philip Brockbank の注釈に知識を負っている。

- 7) ノース (前出), p. 166。
- 8) 4 幕 2 場 24 行, 5 幕 5 場 2 行, 5 幕 6 場 130 行でも “tribe” が使われているが, いずれも「一族」, 「血族」の意味で “*tribus*” の意味ではない。
- 9) 前述の Neale の本では, 遊説中に作った支持者のリストは, 選挙会場で味方の有権者を並ばせる際役立ったという。このことは, The Arden Shakespeare 版の注が触れているように, この箇所の “catalogue” への言及と関係があるという可能性もなきにしもあらずである。
- 10) もちろん, ウィルソンの注には, ノースの訳も引用の上, 言及されてはいる。